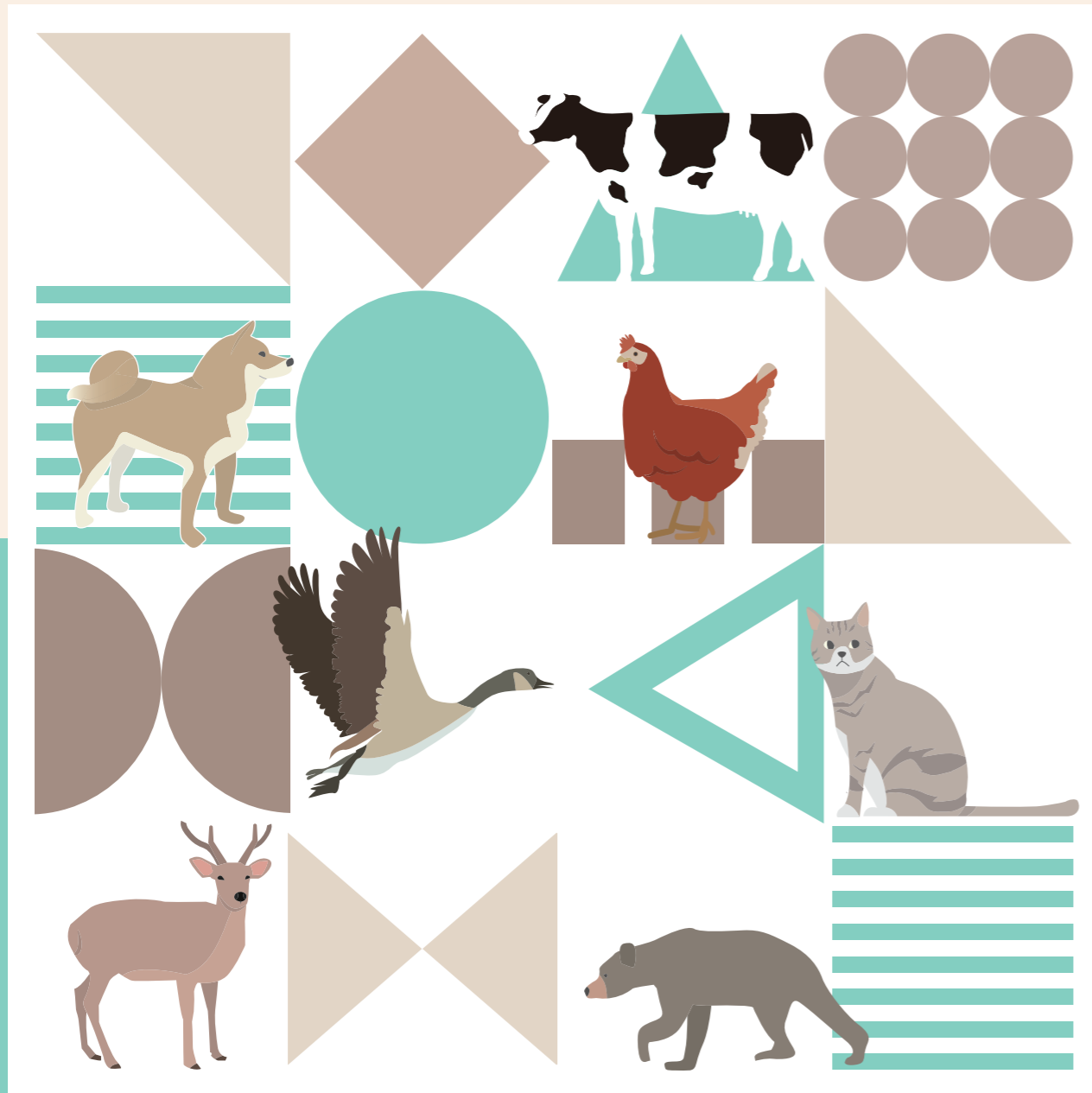
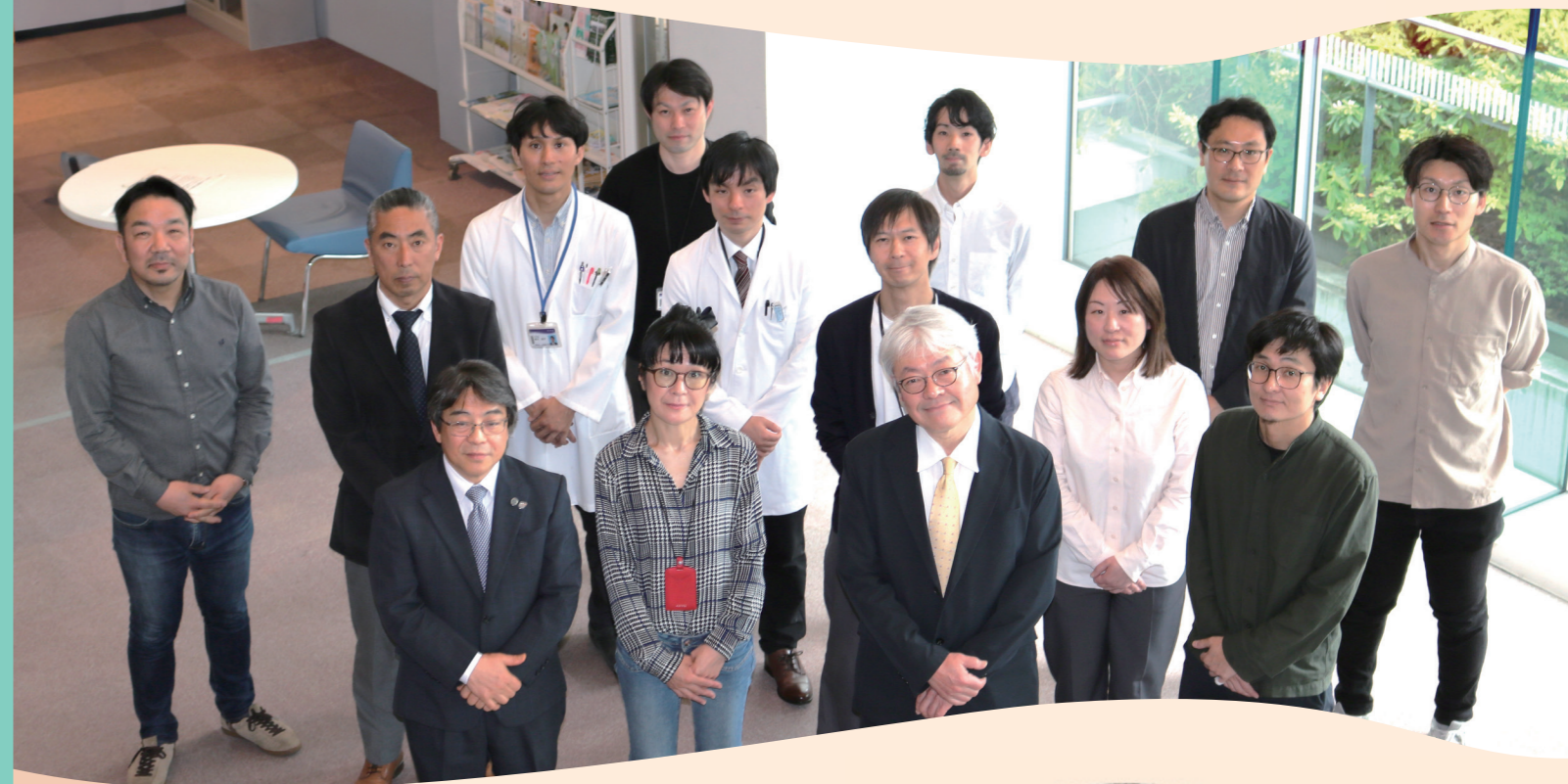


日本獣医生命科学大学 ワンヘルス・ ワンウェルフェア センター



ニチジュウミーティング

皆様のご参加を心よりお待ちしております！

2026.11.1 SUN

日本獣医生命科学大学 B511

10:00 ~

▼ミーティング詳細

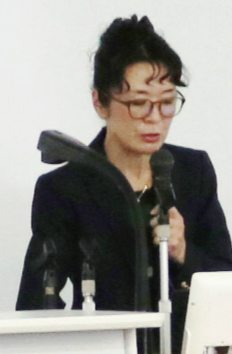


日本獣医生命科学大学
NIPPON VETERINARY AND LIFE SCIENCE UNIVERSITY

〒180-8602 東京都武蔵野市境南町 1-7-1 TEL: 0422-31-4151 (代) FAX: 0422-33-2094

日本獣医生命科学大学 ワンヘルス・ワンウェルフェアセンター キックオフ シンポジウム

動物福祉と産業のSDGs



ワンヘルス・ワンウェルフェアセンター
キックオフシンポジウム

- P3** ▶ 令和7年新設 ワンヘルス・ワンウェルフェアセンター
・ワンヘルス・ワンウェルフェアセンターの紹介
・ワンヘルス・ワンウェルフェアセンター キックオフシンポジウムを開催

- P5** ▶ ワンヘルス・ワンウェルフェアセンター部門紹介
ワンヘルス・ワンウェルフェアセンター所属教員

- P7** ▶ 【新着論文】
・ネコの肺腫瘍からヒトのがんを理解する～ワンヘルス研究が拓く新たな知見～
獣医学科 病態獣医学部門 獣医病理学研究室 道下正貴 准教授
・体毛のホルモンから動物の過去の繁殖状態を明らかに！～妊娠維持に関わるプロゲステロンに着目～
獣医保健看護学科 保全生物学研究分野 梶本樹講師

- P9** ▶ 富士アニマルファーム
2025年4月新設・着任 産業動物部門 教員の紹介(基盤動物科学部門 動物行動福祉学分野 准教授 戸澤 あきつ)

ワンヘルス・ワンウェルフェアセンター

日本獣医生命科学大学 学長 鈴木浩悦

日本獣医生命科学大学は、明治14年、9人の若き陸軍獣医官によって文京区音羽の護国寺に開学しました。護国寺は、世界初の動物愛護法とされる「生類憐れみの令」を発布した徳川綱吉公が建立した寺院でもあります。当時の日本では殖産興業政策のもと、海外から多様な家畜が導入され、日本の風土に適した品種改良と飼養管理の確立が急務でした。同時に、国外から侵入する伝染病が蔓延し、家畜を診療できる獣医師の育成が強く求められていました。こうした社会的要請のもと、馬医学を修めた陸軍獣医官たちが日本最古の私立獣医学校を設立し、本学の礎を築きました。

その後、獣医学や畜産学を含む生命科学は飛躍的に発展しましたが、物流の国際化により病原体の侵入リスクは高まり、また食料自給率の低い日本では、戦争や災害による食料供給への影響が懸念されています。このような状況を踏まえ、本学が掲げてきた到達目標「愛と科学の聖業」、すなわち「動物を護り育て、人類のために有効に活用する」という使命は、現代においてさらに複雑で重要な課題となっています。したがって、学部・学科の枠を超えた全学的研究体制と、他機関との連携を強化することが不可欠です。

このような背景から、本学は2025年1月、「ワンヘルス・ワンウェルフェアセンター」を設立しました。「ワンヘルス (One Health)」は、人・動物・環境の健康が相互に関連しているという理念に基づき、総合的な視点から地球規模の課題に取り組む概念です。新興感染症や抗菌薬耐性菌、生態系の変化など、国境を越えて拡大する問題への対応には、獣医学・医学・生命科学の協働が欠かせません。一方、「ワンウェルフェア (One Welfare)」は、人と動物の福祉が相互に支え合う関係にあるという理念であり、動物福祉を通じて社会の倫理観を高め、人々の心身の健康にも寄与する新しい価値観を示します。

本センターは「動物福祉を基盤に、人と動物が健康で幸福に暮らせる社会の実現」を目指す全学的拠点です。伴侶動物・産業動物・野生動物の三部門を設け、それぞれの現場から得られる知見を融合し、国内外のネットワークを通じて社会実装を推進します。これらの活動は、単なる学術研究にとどまらず、教育・行政・産業界・地域社会が一体となった協働の基盤づくりを意味します。

創立150周年を迎える2031年に向けて、本学は本センターを中核に「人と動物の健康と幸福を支える大学」としての責務を果たし、「愛と科学の心」をもって人と動物の未来をつなぐことを目指します。



ワンヘルス・ワンウェルフェアセンターは、「人と動物が健康で幸福に暮らすことのできる社会の実現」に向け、学内外で連携して推進することを目的に、2025年1月に設置されました。

また、同センターは、「伴侶動物部門」「産業動物部門」「野生動物部門」の3つの部門で運営をしております。

本学がこの分野の教育と研究をリードし、社会に貢献することを目指します。



ワンヘルス (One Health) ってなに？

「人の健康」「動物の健康」「環境の健康」は、深くつながっています。たとえば、動物から人にうつる病気が広がったり、環境破壊により野生動物の暮らしが乱れたりすると、それが人の暮らしにも悪影響を与えることがあります。健康を考えるときは「人・動物・環境」を一緒に守っていくことが大切で、この考え方を「ワンヘルス」といいます。



ワンウェルフェア (One Welfare) ってなに？

「人の幸せ」「動物の幸せ」「環境の心地よさ」も互いに深くつながっています。たとえば、ペットや家畜が快適に過ごせる環境があれば、その飼い主も心が安らぎますし、自然が豊かな場所では、動物も人ものびのびと暮らせます。このように、「人・動物・環境」が一緒に幸せになれる社会を作る考え方を「ワンウェルフェア」といいます。

11月9日(日) キックオフシンポジウム開催

設立を記念して2025年11月9日に
キックオフシンポジウムを開催しました。
約90人が参加しました！



センターや部門の紹介に加え、
国立科学博物館の田島木綿子氏(本学
獣医学科卒業生)に
基調講演を行っていただきました。



田中亜紀センター長
挨拶

シンポジウム終了後には、
交流会も実施され、教職員、在学生、一般の方等、
交流を深めることができました。

他2部門の発表については、
P7・8にて紹介しています！

産業動物部門の紹介

私は、牛や豚などの大型産業動物が「痛み・けが・病気から解放され、健康に過ごせるようにする」ことを目指して研究を行っています。この一環として、現在私が行っている、牛トロウイルスをワクチンベクターとして利用した牛下痢症に対する「万能ワクチン」の開発状況についてお話ししました。



獣医学科 獣医感染症学研究室
氏家誠准教授



伴侶動物部門



動物が身近にいて、ともに健康で幸福に暮らせる社会の実現

産業動物部門



心身ともに健全な動物からの良質な生産とその最大利用

野生動物部門



動物と人が安心して暮らせる環境作り

動物福祉

ペット業界の健全化
動物虐待への対応
動物の災害対策
適正飼養の促進

動物福祉

動物福祉を実現した牧場
飼育環境の改善
科学的裏付け
人材育成

動物福祉

野生動物の福祉
展示動物の福祉

繁殖指導

適正な繁殖の促進
繁殖技術の向上
優良ブリーダーへの支援

動物生産

繁殖技術の向上
効率的な飼養管理技術

保全

希少種の保護
生物多様性の保全
環境治療

疾病予防

疾患の予防・治療
先天性・遺伝性疾患の対応
人医療への貢献

疾病予防

遺伝要因と環境の制御
感染症の予防と治療
人獣共通感染症対策

疾病予防

人獣共通感染症対策
家畜由来感染症の予防

飼い主支援

飼い方・しつけ指導
高齢者への支援
ペットロスケア
介在療法

製品開発 質保証

安心安全な食品
おいしさの追求
代替品の開発

社会支援

鳥獣被害対策
快適な飼育環境作り

各部門の取り組み

動物と人がともに
幸せに暮らすために

伴侶動物（人とともに生活を共にする動物）とヒトがともに健康で幸福に暮らせる社会の実現を目指し、動物虐待への対応、適正飼養の促進、疾患の予防・治療、先天性・遺伝性疾患への対応、適切な繁殖の促進、動物の災害対策など様々なことに取り組んでいます。

ニチジュウ×ウイルス逆遺伝学
—最新技術で牛や豚を病気から守る—

ウイルス逆遺伝学とは、ウイルスの遺伝子を意図的に書き換えて、新しいウイルスを人工的に作る技術のことです。まるで“ウイルスのプログラムを編集する”ようなイメージです。ニチジュウの研究チームは、この技術を活用し、牛や豚の病気を防ぐ新しいワクチンの開発に取り組んでいます。この研究は、大切な家畜を病気から守るだけでなく、私たちの食の安全と安定供給にもつながっています。

動物も人も安心して暮らせる環境とは？
—ストレスから見た動物を取り巻く環境の評価—

近年、動物や人の健康状態を「目で見るだけ」では評価できない場合があることがわかってきました。そこで注目されるのが生理指標で、中でも「ストレス」は環境が生活に与える影響を知る手がかりとして広く用いられています。血液や糞、体毛からストレスホルモンの量を測定することで、見えない負担を数値化できます。ニチジュウでも、野生動物や展示動物のストレスを測り、その知見を生物多様性の保全や福祉向上に活かしています。

日本獣医生命科学大学 ワンヘルス・ワンウェルフェアセンター教員 (令和8年4月1日現在)

センター長

- 田中 亜紀 特任教授（獣医学科 応用獣医学部門）
・【JAC】ワンウェルフェア寄附講座 寄附講座教授（兼務）
・シェルターメディスン講座【日本動物福祉協会】社会連携講座教授（兼務）



伴侶動物部門

部門長

道下 正貴 准教授（獣医学科 病態獣医学部門）

教員

- ・田中 亜紀 特任教授（獣医学科 応用獣医学部門）
・鈴木 亮平 講師（獣医学科 臨床獣医学部門）
・小林 正人 講師（獣医学科 臨床獣医学部門）



産業動物部門

部門長

小澤 壯行 教授（動物科学科 動物生産実践科学部門）

教員

- ・氏家 誠 准教授（獣医学科 病態獣医学部門）
・三浦 孝之 准教授（食品科学科 産業創生科学部門）
・戸澤 あきつ 准教授（動物科学科 基盤動物科学部門）
・渡辺 雄貴 講師（動物科学科 応用動物機能科学部門）



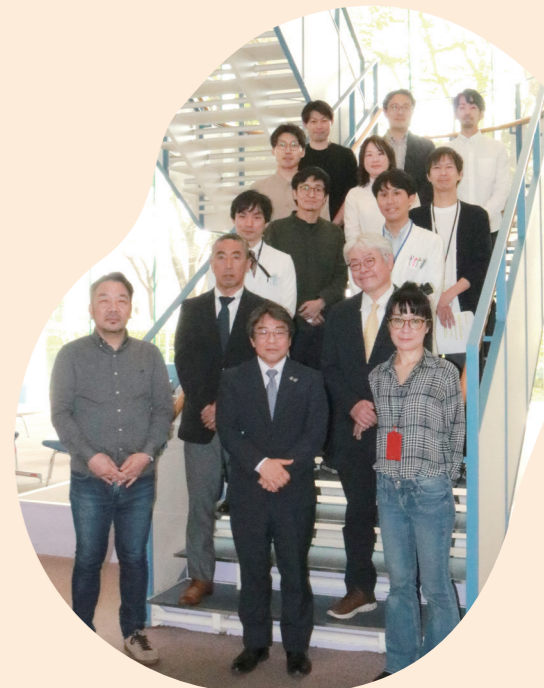
野生動物部門

部門長

山本 俊昭 教授（獣医保健看護学科 獣医保健看護学応用部門）

教員

- ・加藤 卓也 准教授（獣医学科 応用獣医学部門）
・寫本 樹 講師（獣医保健看護学科 獣医保健看護学応用部門）
・桑原 考史 准教授（動物科学科 基盤動物科学部門）





伴侶動物部門



獣医学科 伴侶動物部門 部門長
道下正貴 准教授



野生動物部門



獣医保健看護学科 保全生物学研究分野
寫本樹 講師

ネコの肺腫瘍からヒトのがんを理解する ～ワンヘルス研究が拓く新たな知見～

論文名：

Pulmonary epithelial-myoepithelial carcinoma with high-grade transformation in a cat
(和訳) ネコに発生した高悪性度転化を伴う肺上皮筋上皮癌の一例

研究内容：

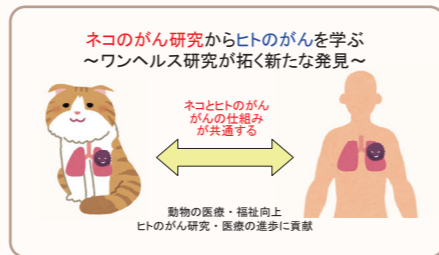
今回、ヒトの肺でまれにみられる「上皮筋上皮癌」とよく似た特徴をもつ腫瘍が、ネコに自然発生していることを明らかにしました。本研究では、ネコの肺腫瘍を病理学的に詳しく調べ、その成果が国際学術誌 *Journal of Feline Medicine and Surgery Open Reports* に掲載されました。本研究では、ネコとヒトとあいだで共通するがんの成り立ち（腫瘍病態）が存在することが示されました。これは、ヒトと動物の健康が深く結びついているとする「ワンヘルス」の概念を、病理学・腫瘍学の視点から裏付ける成果であり、伴侶動物の医療の質の向上や動物福祉の発展に貢献するだけでなく、動物の病気を理解することが、ヒトのがん研究や医療の進歩につながる可能性を示しています。さらに、獣医学と医学をつなぐ重要な架け橋として、今後の比較腫瘍学やトランスレーショナル研究へのさらなる展開が期待されます。

著者：

道下正貴 日本獣医生命科学大学 獣医学部 獣医学科 病態獣医学部門 獣医病理学研究室

掲載雑誌：

Journal of Feline Medicine and Surgery Open Reports
(2026年、12号 20551169261421988)
Sage Journals
doi: 10.1371/journal.pone.0342346



論文名：

Hair progesterone reflects past reproductive activity in the invasive Pallas's squirrel *Callosciurus erythraeus*
(和訳) クリハラリスの体毛プロゲステロンは過去の繁殖活動を反映する

研究内容：

近年、体毛に含まれるホルモンを測定することで対象個体の健康状態を評価できることがわかってきています。本研究では、クリハラリスの体毛に含まれるプロゲステロンを測定することで過去の繁殖状態を推測可能であることを示し、その成果が国際学術誌 *General and Comparative Endocrinology* に掲載されました。

本研究は外来種管理を対象としており、捕獲・駆除といった介入が不可避であるという現実を前提としています。その中で、本研究で提案した体毛プロゲステロン分析は、繁殖活動の長期的評価を可能とし、個体群の繁殖状態を効率的に把握する手法です。これにより、繁殖が活発な個体群や地域を特定し、管理の優先順位を明確化することが可能となります。結果として、無計画な捕獲を減らし、必要最小限の介入で個体群管理を実施できる可能性があります。

本研究は、外来種管理という観点から、動物と環境の関係を扱う点で、ワンヘルスの考え方とも関連するものです。また、効率的な管理計画を通じて介入の最適化を図る点において、動物福祉への配慮を含むワンウェルフェアの枠組みとも親和性を有すると考えられます。

著者：

寫本樹 日本獣医生命科学大学 獣医学部 獣医保健看護学科 保全生物学研究分野

掲載雑誌：

General and Comparative Endocrinology (2026年、379巻、114915)
Elsevier
<https://doi.org/10.1016/j.ygcen.2026.114915>



11月9日(日) キックオフシンポジウム開催

ーキックオフシンポジウムでのお話

伴侶動物部門では、動物とともに健康で幸福に暮らせる社会の実現に向けて動物福祉、繁殖指導、疾病予防、飼い主支援に向けて取り組んでいます。今回のキックオフシンポジウムでは当研究室で実施した病理解剖症例データをもとに、若齢の犬および猫の好発疾病を紹介しました。

ー今後の展望

若齢の犬および猫で好発する先天性疾患、感染症を対象に先天性疾患の原因遺伝子の探索、それら原因遺伝子の診断システムの開発および機能解析、感染症の発症機構の解明、診断システムの開発および予防・治療法の開発に取り組み、疾病予防などに貢献したいと考えています。



11月9日(日) キックオフシンポジウム開催



ーキックオフシンポジウムでのお話

野生動物におけるストレス負荷の増加は必ずしも健康を損なうものではなく、むしろ適応的な生理応答であることが示されています。しかし、”ストレス=悪いもの”という一般的なイメージが先行しているため、野生動物と飼育動物におけるストレスの解釈の違いについては十分に議論されてきませんでした。そこで本シンポジウムでは、ストレスから読み取れることや課題を提示し、ワンヘルス・ワンウェルフェアの視点からストレス研究の可能性を紹介しました。

ー今後の展望

私の興味・関心は、野外環境におけるストレス反応の機能にあります。ストレス反応の評価手法を確立しつつ、野生動物におけるストレスの意味を解釈することを目指しています。また、ストレス研究の応用として、動物園や水族館で飼育される展示動物においても、福祉的な観点からストレスモニタリングを実施し、彼らがより健全に暮らせるよう支援していきたいと考えています。

研究・教育拠点としての 富士アニマルファーム



富士の大地で未来を耕す —教育×研究×生産×社会貢献の最前線

霊峰富士の麓、標高1,000mに位置する富士アニマルファームは、豊かな自然環境と清冽な気候に恵まれた日本有数の集約酪農地域の中核を担う教育研究牧場です。1992年に本学の付属施設として山梨県富士河口湖町に設立されて以来、獣医学・畜産学・食品科学の実践教育の場として、数多くの学生に親しまれてきました。

本牧場は「教育」「研究」「生産」「社会貢献」の4つの指針を掲げ、学問と実践の融合を目指しています。教育面では、獣医学・動物科学・食品科学分野の学生が、産業動物の飼養管理・繁殖・衛生に関する実践的な学びを深める拠点となっています。2024年春には新たに「富士セミナーハウスB棟」を開設し、60名以上が宿泊可能な教育環境を整備しました。研究面では、乳牛の周産期疾病(ケトosisなど)の診断・治療、肉用牛の体外受精卵生産、アニマルウェルフェアに配慮した生乳生産シ

ステムなど、多様な研究を展開しています。また、地域連携による酪農教育ファーム事業や、市民向けの体験講座も準備が進められています。

生産面では、隣接農地の拡張により自給飼料生産の強化を進め、持続可能な循環型農業の実現を目指しています。安全で高品質な畜産物の生産とともに、堆肥の地域還元など、環境負荷の低減にも取り組んでいます。さらに、家畜人工授精講習会や高大連携事業などを通じて社会貢献活動を推進し、教育・研究・地域社会を結びつなぐ役割を果たしています。富士アニマルファームは、自然と科学、地域と大学を結び架け橋として、次世代の動物産業を支える人材育成に努めています。

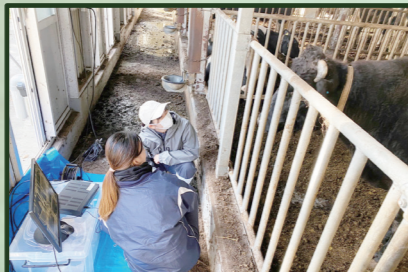
施設紹介

搾乳牛舎



搾乳や給餌などの実習のほか、研究室の研究・実験などでも活躍する教育研究牧場です。

牛舎での研究の様子



馬の放牧地



基盤動物科学部門 動物行動福祉学分野の「適切な教育」の研究(詳細は右ページ)でも活躍中の富士アニマルファーム★

食堂紹介



富士山を眺めながら食事ができます!



管理人特製の名物ハヤシライス!



富士山の湧き水で作ってます! 管理人の渡辺さん

手入れの行き届いたピカピカの厨房!

2025年4月新設・着任 産業動物部門 教員の紹介

基盤動物科学部門 動物行動福祉学分野

2025年4月新設・着任!



准教授 戸澤 あきつ

2025年4月に「動物行動福祉学教室(当時の名称)」が新設されました。 どのような学問分野を扱っているのでしょうか?

「動物行動福祉学」とありますが、大きく「動物行動学」と「動物福祉学」に分けられます。

「動物行動学」は、動物の行動を観察し、データをとって見えてくる客観的な数値から動物の本能的な行動や生態、そして心理状態について理解していく学問です。

「動物福祉学」は、動物の心身の健康状態について理解し、できるだけ苦痛や苦悩を減らすことを考える学問です。

私たち人間は、動物を飼育するにあたってこれまでは「(肉体的な健康状態を維持するために)どのような内容の食餌を準備すればいいか」「どのような飼育環境が適しているか」といったことを科学的な側面からひも解いてきました。しかし、そのような学問分野が成熟していく中で、「この方法が本当に動物にとって適しているのだろうか?」と、アウトプットについても考えるようになりました。この「アウトプット」、つまり動物の状態を理解しようとする「動物福祉」を捉えるひとつの方法として動物の行動を観察しています。動物の行動を見て、動物の心理状態や健康状態を把握しようとしているのです。

戸澤先生はどのような研究をされていますか?

学問的に説明をすると難しい言葉になってしまいましたが、具体的な研究について紹介します。主に、ウシやブタなどの家畜(産業動物)と、動物園や水族館で飼育されている動物(展示動物)を対象として研究しています。

「産業動物」では、例えばブタが自然な行動ができる放牧飼育と、どうしても制限されてしまう屋内飼育とで行動や生産性の比較をしました。ほかには、ウシがトラックで輸送されてきた後、どの程度で通常の生活を送れるようになるか観察したことがあります(輸送ストレスの影響)。

「展示動物」では、いわゆる“ふれあい”というイベントは動物(ヤギ、テンジクネズミ)にとって強いストレスになっていないか評価しました。また、展示動物の日々の暮らしを工夫することで、動物たちの本能的な行動や能力を引き出し、ストレスの軽減やよりよい生活を提供する「エンリッチメント」について検討することもあります。

これからどのような研究を行う予定ですか?

動物にとって「適切な飼育」についてより追及していきたいと考えています。「適切な飼育」と一言で言っても、物理的な環境、栄養管理や健康管理、同居する仲間との関係、飼育している人との関係、など様々な視点が必要になります。

これから始める研究のひとつに、富士アニマルファームのウシに対するゴム状ブラシの提供があります。ブラシを使ってもらえるかどうか、体の汚れはどのように変化するかといったことを調査する予定です。ウシもグルーミングに対する欲求があるので、ブラシがある時とない時ではどのように行動が異なるかを観察します。

動物と人との関係についても研究を始めています。国内の酪農家はアニマルウェルフェアをどのように考えているのか、そしてより受け入れられていくためにはなにがハードルになっているのかを調査する予定です。また、動物園や水族館の来訪者は動物福祉についてどのような認識を持っているのかといったことも理解していきたいと考えています。

学生へ向けてメッセージをお願いします!

動物の病気やケガに向き合うのは獣医学科や獣医保健看護学科の分野になりますが、「動物そのもの」や「彼らの日常生活」に向き合うのは動物科学科で、学ぶ内容が大きくかわります。動物のこと、そして社会の中での動物の位置付け、人との関係といったことをより深く学び、動物の飼育環境を考えられるのは動物科学科ならではの学びだと思います。様々な分野から動物について広く学び、「動物にとってのより良い暮らし」について考え、実践したいという学生はぜひ声をかけてください。